

レファレンス教育の動向

Trends in Teaching Reference

長 沢 雅 男

Masao Nagasawa

Résumé

Library education has been harassed by the vocationalism since the establishment of the first library school in the United States. The educational programs of library schools have continuously been re-examined to meet changing library and social needs. Teaching of reference courses in the past was concentrated upon making students familiarized in the individual sources of recorded knowledge. When the title-centered reference course was considered no longer feasible, one alternative was to emphasize types of reference materials.

Current topics of reference teaching have been disclosed by following up the references quoted in current articles. Recently, such creative approach to teaching as a case study method appeared to be taking place in reference courses. This method relates the course content to the realities of a library situation. Advocates of the method criticize traditional "textbook-lecture-problem" method for having been compelling students to memorize details of a large number of reference tools.

The history of teaching reference courses in the university level in Japan goes back to 1951, when the Japan Library School was first established. Although the content of the course in later period differed to some extent from the ones in earlier period, there was not much changes until 1961. The basic reference course was given in one year, in which both reference methods and reference materials were explained.

In order to allocate much more hours to discuss reference method, the introductory reference course was divided into two courses in 1968, 'Reference and Information Sources' and 'Reference and Information Service.' We arrange the content of latter course in five major areas, the first dealing with library users—their information gathering habits, analysis of needs, etc. The second unit deals with information sources—recorded information, the basic reference tools taught in the former course being used as illustrations, etc. The third unit deals with the reference process—practical matters of reference interview, the formulation of search strategies, etc. The fourth unit deals with bibliographic services—compilation of bibliographies, indexes, etc. The fifth unit

deals with reference-related administrative situations—the function of reference work, reference departments, etc.

In addition to the introductory reference courses, we had had an advanced reference course. In 1962–63, we decided to develop it after the pattern of library schools in the United States, grouping all materials into three broad fields, humanities, social sciences, and science and technology.

In reality, we are still forced to tackle with several problems in teaching reference. The reference work is not well recognized in Japan as an integrated function of the library. There are shortages in bibliographical tools to use Japanese materials effectively. As for the problems of the students, with a few exceptions, they have not had experience in or contacts with libraries rendering good reference services. Most of the students know very little about subject fields and they have had scarce opportunity to study or use reference tools previously. Taking these problems into consideration, we feel the strong need to cooperate with professional librarians at work in various types of libraries so that we can develop both method and content of the reference course based upon the gradual improvement in the field.

(School of Library and Information Science)

はじめに

- I. アメリカにおけるレファレンス教育の変遷
- II. 最近の問題
- III. わが国におけるレファレンス教育の推移と現況
おわりに

はじめに

1960年代が終ろうとしている。Melvil Dewey が 1887 年にコロンビア大学に図書館学校を創設してから、すでに 80 年を経過している。これは従来、図書館で行なわれていた徒弟制の図書館員養成に変わって、プロフェッショナル・スクールで養成しようとした最初のものであった。また、その教育内容としては、理論的研究にはほとんど配慮することなく、徹底した実務のカリキュラムを採用していた。つまり、図書館業務についての理解を深めることを主眼とする、実務に密着した内容の教授を目指していた。これは社会の要請に即応する専門職教育を目的とするものであって、今日の実務中心の図書館学教育の伝統はすでにこの頃に確固たる基礎がすえられたといつてよい。

図書館学教育が社会の要請に伴い、現実の図書館業務の内容に即して行なわれたとするならば、当然、図書館に対する社会の要求の変化によって教育内容は変るべきはずである。Dewey がコロンビア大学に図書館学校を

設けた 19 世紀末から今日までの社会は、それまでのいずれの時代にも比類のないほどの顕著な変貌をとげた時期であった。それだけに、実務教育としての図書館学教育の内容に及ぼした社会の影響は著しい。

アメリカの図書館学教育の歴史において、1926 年のシカゴ大学の図書館学大学院の設置をはじめとする大学院課程での専門職教育がみられるようになったこと、多数の図書館学校で教科目を細分化して、特殊の科目を漸次増設したことなど、いずれも社会の変化に呼応した教育内容の改変とみることができる。

図書館学教育科目のうちでも、レファレンス関係科目の増設、分化は著しい。とりわけ、情報化時代の到来は、今日のレファレンス教育のあり方に強く再検討を迫っている。なぜならば、図書館学関係教科目のうちでも、情報を求める利用者に直接的なサービスを提供するレファレンス・ワークは、利用者の要求の変化に直接的な関係をもつからである。

さらに、レファレンス・ワークについて確固たる理論がないことも、この科目の扱い方が問題にされる原因と

なっている。そこで、近年では、合理的な技術的判断の基礎となる客観的な認識を供与する情報科学を基礎科学として、その応用科学としての側面から、内容の検討が進められてもいる。

上述のようなアメリカの図書館学教育の変遷をたどることは、わが国の図書館学教育を検討する上に参考となる問題を探りあてるのに有意義であろう。ことに、レファレンス教育の場合には、レファレンス・ワークというものがアメリカで発達したサービス様式であり、それがまだわが国独自の展開をみていない現状であるから、アメリカでの経過を見守ることによって、多くの示唆が得られると思われる。

したがって、本稿では、レファレンス教育の内容と教授方法の両面からの検討を進めることにする。なお、これまでの各図書館学科目が個別的な図書館実務に関する知識および技術を教授することに主眼を置いたものから成りたっていたのであるから、レファレンス教育を考える場合、つねに他の諸科目との関係およびその位置づけを念頭におく必要がある。

I. アメリカにおけるレファレンス教育の変遷

レファレンス・ワークが実務面において重視されるようになり、サービスの充実が図られるに伴って、レファレンス関係科目の重要性も次第に認識されるようになった。しかし、その科目内容についての見解は必ずしも一致しているわけではない。ある人はレファレンス資料に重点をおくべきであると主張し、他の人はレファレンスの方法に主眼をおくべきであるという。

レファレンス教育が、いずれの面を強調すべきであるかという点で論者の見解に対立があるとはいっても、一方のみで十分であるという主張はみられない。レファレンス資料の知識がレファレンス・ワークを決定的に左右するという考えから、資料コースとしてのレファレンス科目を捉えている立場の人でも、その導入部においてあるいは資料解説に附随してレファレンスの方法に触れないわけにはいかない。

アメリカのレファレンス教育の変遷をたどってみると、その初期には、いわゆる資料科目として、参考図書を中心とする個々の資料内容の理解に重点をおいた教育が普及していた。¹⁾ その後の変遷はこれにレファレンスの方法の問題を加味するかたちをとっているが、このことが同時に教授法の多様化をもたらしている。すなわち、当初はせいぜい質問解答という問題解決の方法が採

られているのにすぎなかったが、レファレンスの方法が重視されるに及んで、今日ではケース・スタディーに代表される新しい教授法の採用が試みられるようになってきた。

20世紀に入ると、資料科目としてのレファレンス科目が一応性格を固めたといつてもよいが、それは必ずしも個別的なレファレンス資料の解説にとどまらず、Alice B. Kroeger が1902年に *Guide to the study and use of reference books* を発表して以来、レファレンス資料をタイプの面から捉えて、その特性を理解しようとする考え方が強まってきている。Kroeger 以来、I. G. Mudge を経て、C. M. Winchell の *Guide to reference books*²⁾ が編さんされたことによって、レファレンス科目は、いわばバックボーンを与えられたといつてもよい。これが教科書として、あるいは参考書として選ばれたことは資料科目としてのレファレンス教育を特徴づけている。

1930年代に、J. I. Wyer の *Reference work*³⁾ が多くの図書館学校の教科書として普及したことはレファレンス教育に方法の問題を導入するようになったことのあらわれであるとも考えられる。しかし、レファレンス教育における主流はあくまでも参考図書についての理解を深めることであった。実務にたずさわるレファレンス・ライブラリアンにとって最も必要とされるものは参考図書をはじめとする資料の知識であったからである。

1963年に、E. J. Reece は図書館業務の分析を通じて図書館学教育の主要題目を導き出しているが、その中で「参考図書とレファレンス・ワーク」の内容を次のように示している。

- (a) 知識の主要分野とその関連文献、とくに、下記の
 - (b) と (c) に属する資料を含む。
- (d) レファレンス・ソースとしての図書館資料。例えば、歴史、伝記、旅行、論文、政府刊行物、協会出版物、機関誌、定期刊行物、切り抜き、絵画、小説。
- (c) レファレンスに利用するためにつくられたツール。例えば辞書、百科事典、コンペンディアム、地図帳、便覧、索引、コンコードダンス、主題書誌。
- (d) レファレンス・サービスの方法。例えば質問者との面接、探索手順、図書館以外の資料の利用、探索結果の記録、利用者に関連の深い新資料の評価、参考文献リスト・書誌の作成。⁴⁾

レファレンス教育の動向

これによっても依然として資料の解説が中心的位置を占め、方法的な問題は附随的に扱われているにすぎないことがわかる。

1930年代は図書館の主題部門化を促した時代であり、また専門図書館が増加した時代である。これらの傾向がレファレンス教育における主題分野の専門的知識の育成さらに各分野の専門文献の強調を促した。「社会科学資料」「人文科学資料」「科学・技術資料」などの科目名で、レファレンス上級科目が新設されたのは、このような事情によるものである。

アメリカの図書館学教育が社会の要求に応じて変化したとはいえ、無方針に現場の要求通り、その科目内容を変えてきたわけではない。コア・カリキュラムの検討についても、絶えず変貌する図書館学教育科目のうちから中核的要素を抽出し、不変な内容を求めようとする意図が根底にあったと考えられる。

1953年8月、シカゴで開催された研究集会の報告書によれば、コア・カリキュラムに含まれる領域として、次の七つがあげられている。すなわち、(1) 社会における図書館、(2) プロフェッショナルリズム、(3) 資料、(4) サービス、(5) 管理、(6) コミュニケーション、(7) 調査研究である。これらのうちで、レファレンス教育科目と関連のある(3)には、下記の諸点を含めるべきであるという勧告をしている。

- i. 図書販売(図書形態のもの、雑誌などを含む)の機構と活動および非図書資料の考察。
- ii. 資料の評価、選択における原理と実践および特定の利用者群を対象とする蔵書構成の方法。
- iii. 図書や非図書資料のかたちをとる基本的な書誌的ツール、レファレンス・ツールの利用法についての知識・判断。
- iv. 自分の疑問に対する答あるいは自分の問題の解決を見出すとする利用者を援助する目的で、図書館資料を解明すること。その回答が印刷物の中から得られようと、その他の情報源から得られようと、それは問わない。
- v. あらゆるレベルの利用者にふさわしい主題分野における基本図書や最近の図書の概観、およびツールとしての図書の評価。
- vi. 各種の主題領域における各種のタイプの非図書資料を知って評価すること。⁵⁾

これらのうち、iii~viがレファレンス教育科目と特に関連が深い。また、(4)サービスのうちの対内サービスの一つとして、レファレンス・サービスが含まれている。それは下記の4項からなる。

- i. 組織と方針。
- ii. レファレンスの面接の性格。
- iii. 基礎的情報源 (a) 書誌的なもの、(b) 情報的なもの、(c) 人、(d) 図書館相互貸借。
- iv. 図書館利用法の指導。⁶⁾

上記の内容からも明らかのように、レファレンス教育科目は資料にかかわるものと、その利用方法にかかわるものと考えられる。実際に科目の名称を拾ってみれば、この点が明らかになる。例えば、'Reference Materials and Methods,' 'Literature of the Humanities,' 'Literature of the Social Sciences,' 'Literature of Science and Technology' などである。F.N.Cheneyによれば、アメリカの32の公認図書館学校に175のレファレンス関係科目が置かれているが、その大部分は少なくとも上記の4コースを置いている。⁷⁾ また、科目名の半数以上は主題分野を表わすことばか、資料のタイプ名を表わすことばをもっている。レファレンス関係科目が資料科目といわれるゆえんである。

II. 最近の問題

最近のレファレンス教育に関する問題点を探るための一つの方法として引用文献追跡方法が役立つはずである。これは比較的新しい関係文献を選び、そこに引用されている関係文献を拾い出し、さらにそれに引用されている関係文献を拾い出すという方法を繰り返して、問題となっている論文を確定することを目的としている。

このような目的のために、*Journal of education for librarianship*の特集「書誌とレファレンスの教育」⁸⁾に含まれている論文を発端論文として選ぶことにした。これはレファレンス教育における四つの立場から、それぞれの見解を披瀝した四つの論文からなる特集である。すなわち、

- Grotzinger, Laurel. "One road through the wood" (A)
Shosid, N. J. "Reality in reference teaching" (B)
Wood, R. F. "Bibliography and the seminar" ...

.....(C)
 Ziskind, Sylvia. "An introduction to reference"
(D)

である。

上記のように各論文を順次 (A)～(D) と表わすことにする。(A)はレファレンス・プロセスの教育に科学的研究の手法を導入すべきことを主張している。(B)は role playing の技法を採用した方がよいという。(C)はセミナー方式を推奨した意見を述べ、また (D)はほぼ伝統的なレファレンス科目における指導の実際を紹介している。

それぞれの論文に引用されている文献数 (X) と、そのうちでレファレンス教育に関係している文献数 (Y) を求めたところ、次のような結果が得られた。

	(X)	(Y)
(A)	13	6
(B)	17	9
(C)	6	0
(D)	0	0

したがって、この場合、引用文献追跡の手がかりを与えるのは (A), (B) の 2 論文だけである。

(A) の (Y) の内訳を、便宜上、執筆者名のアルファベット順にあげてみると、次の通りである。

Bonk, W. J. "The core reference course," *Journal of education for librarianship*, vol. 4, Spring 1964 1A₁
 Bonk, W. J. and Galvin, T. J. "A reference encounter," *Library journal*, vol. 90, Apr. 15, 1965 1A₂
 Bunge, A. A. "Library education and reference performance; a preliminary report of a study," *Library journal*, vol. 92, Apr. 15, 1967.....1A₃
 Carroll, L. D. "Down with the lists; this is the way we teach," *RQ*, vol. 6, Fall 1966.....1A₄
 Freides, Thelma, "Will the real reference problem please stand up?" *Library journal*, vol. 91, Apr. 15, 1966.....1A₅
 Galvin, T. J. "The case technique in education for reference service," *Journal of education for librarianship*, vol. 3, Spring 19631A₆
 以下、同様に、(B) の (Y) の内訳は

Bonk, W. J.....1A₁ と同じ
 Bonk, W. J. and Galvin, T. J.....1A₂ と同じ
 Galvin, T. J.....1A₃ と同じ
 Galvin, T. J. *Problems in reference service: Case studies in method and policy*. New York Bowker, 19651B₁
 Held, R. E. "Teaching reference and bibliography," *Journal of education for librarianship*, vol. 5, Spring 19651B₂
 Marco, G. A. "Discussion group summary," *Journal of education for librarianship*, vol. 4, Spring 19641B₃
 Shores, Louis, "We who teach reference," *Journal of education for librarianship*, vol. 5, Spring 19651B₄
 "Simmons' support for the 'case,'" *Library journal*, vol. 91, June 1, 19661B₅
 "Views on teaching reference," *RQ*, vol. 4, Mar. 19651B₆
 1A₁ の (X) は 0, (Y) は 0
 1A₂ の (X) は 0, (Y) は 0
 1A₃ の (X) は 0, (Y) は 0
 1A₄ の (X) は 6, (Y) は 6, その内訳は,
 Bonk, W. J. "The core curriculum and the reference and bibliography courses," *Journal of education for librarianship*, vol. 2, Summer 1961 2A₁
 Bonk, W. J.....1A₁ と同じ
 Bonk, W. J. *Use of basic reference sources in libraries*. Ann Arbor, Mich., Univ. of Mich., 1963... 2A₂
 Galvin, T. J.1A₆ と同じ
 Held, R. E.1B₂ と同ず
 Shores, Louis1B₄ と同じ
 1A₅ の (X) は 5, (Y) は 5, その内訳は,
 Bonk, W. J.1A₁ と同じ
 Bonk, W. J.2A₂ と同じ
 Bonk, W. J. and Galvin, T. J.1A₂ と同じ
 Galvin, T. J.1B₁ と同じ
 Katz, W. A. "In the reference arena," *Library journal*, vol. 90, June 1, 19652A₃
 1A₆ の (X) は 11, (Y) は 3, その内訳は,
 Bonk, W. J. *Composite list of the titles taught in*

レファレンス教育の動向

basic reference by 25 of the accredited library schools. Ann Arbor, Univ. of Mich., 1960...2A₄

Boyd, A. M. Personnel and training for reference work. <Butler, Pierce, ed. *The reference function of the library*. Chicago, Univ. of Chicago Press, 1943> p. 249-662A₅

Knox, M. E. The development of a staff for reference work. <Illinois Univ. Library School. *The library as a community information center*. Champaign, Ill., Illini Union Bookstore, 1959> p. 137-51.....2A₆

1B₁ の (X) は 0, (Y) は 0

1B₂ の (X) は 0, (Y) は 0

1B₃ の (X) は 0, (Y) は 0

1B₄ の (X) は 8, (Y) は 1, その内訳は,

Bonk, W. J.....2A₂ と同じ

1B₅ の (X) は 0, (Y) は 0

1B₆ の (X) は 0, (Y) は 0

2A₁ の (X) は 0, (Y) は 0

2A₂ の (X) は 0, (Y) は 0

2A₃ の (X) は 0, (Y) は 0

2A₄ の (X) は 0, (Y) は 0

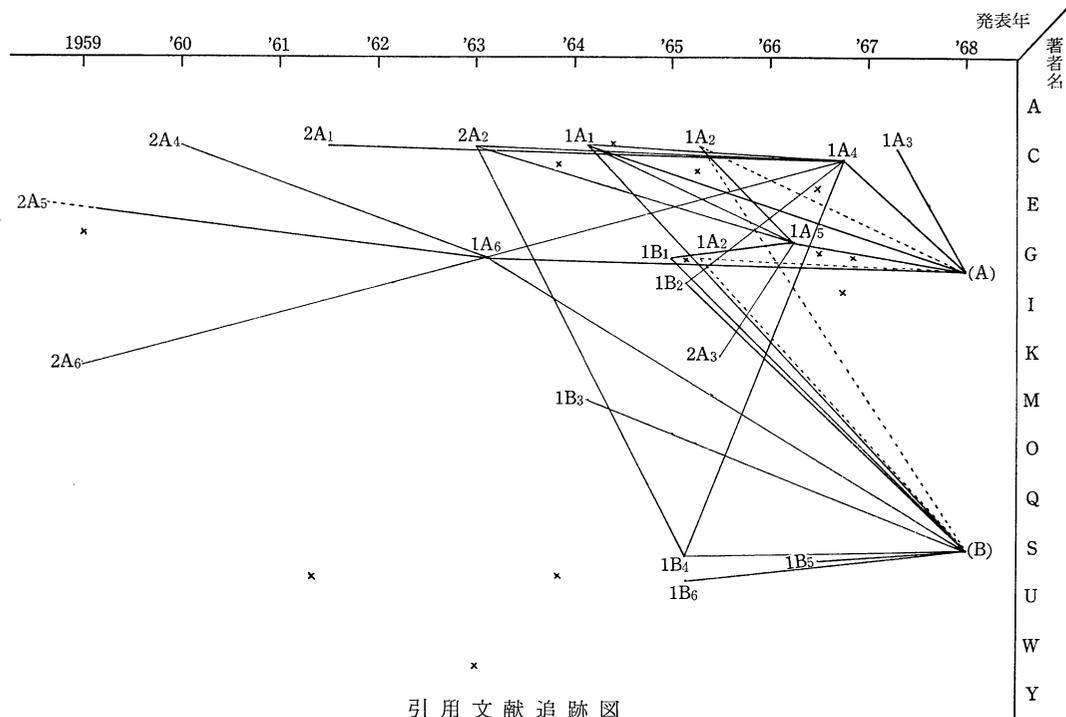
2A₅ の (X) は 13, (Y) は 1, その内訳は,

Shores, Louis. Reference course content in accredited library schools. <Association of American Library Schools. *Report of meeting*, Chicago, December 28, 1941> p. 13-19.....3A₁

2A₆ の (X) は 0, (Y) は 0

以上のように順次たどった文献の引用関係を一覧できるように示したのが引用文献追跡図である。これは横軸に暦年をとり、縦軸にアルファベットのA~Zをとった図である。したがって、各論文ごとに、その発表年月と執筆者名の頭字によって図上の位置を示すことができる。ただし、2名による対談形式の記事の場合には、それぞれの名前のもとに分割し、2カ所の点を示すことにした。このようにして引用論文と被引用文献を結んでいった結果できあがったのがこの図である。なお、点線で結んだ部分は2カ所に分割された場合を示している。ほかに、直線で結ばれていない×印で示した箇所は、この引用文献追跡方式によらないで、*Library literature* によって探し出されたレファレンス教育に関する文献の位置を示すものである。

この図の面では必ずしも明瞭ではないが、1B₄、1B₅などは別として、1B₃、1B₆などはいずれも Bonk ある



引用文献追跡図

いは Galvin の所説に関するから、引用文献はほぼ Bonk と Galvin の論文に関係のあるものとして二大別することができる。したがって、1960年以降のレファレンス教育にかかわる関心はこの2人の所説に起因するものと考えられる。

そこで、まず Bonk の諸論文にもとづいて、その主張を紹介することにしよう。彼はアメリカの公認図書館学校25校のレファレンス基礎科目、社会科学および人文科学の資料科目について調査を行なった。調査対象はそれぞれのシラバスに含まれている参考図書類である。その結果、作成されたのが *Composite list of titles taught in basic reference by 25 of the accredited library schools* と *Composite lists of titles in the humanities and social sciences* である。

彼は、この種の科目は基本的なものであるから、公認図書館学校では学生が当然習っておくべき主要なタイトルについて、かなりの共通性があるはずであると予想していた。しかし、レファレンス基礎科目について参考図書1,202点を調査したところ、全部共通にリストに収録されているのは、わずか5点に過ぎないことが明らかになった。また、社会科学のシラバスにリストされている2,000点のうち、57.7%をリストしているのは1枚のみ、半分以上が一致してリストしているのは5%である。さらに、人文科学のシラバスにリストされている1,500点のうち、35.6%をリストしているのは1枚のみ、半分以上が一致してリストしているのは7%であるという。選ばれたタイトルはただ一つのタイプについて例示的にあげられたかも知れないし、いずれの館種に重点をおくかによっても、さらに教師の個人的な好みによっても左右されるであろう。また、カリキュラム全体の関連から、そのような基本参考図書が他の科目で教えられることもありうる。それにもかかわらず、各学校間における差異があまりにも著しいことを Bonk は問題にし、疑問を投げかけたわけである。

彼は次のようにいっている。もしもこのようなことが医学教育の場合にあったらどうであろうか。"仮りにインターン生が病院で働き、学校の解剖学のコースで筋肉の解剖は習わなかったから責任はもてないとか、あるいは彼の学校では頭のことは何も習わなかったといえるだろうか、"⁹⁾と疑問を提示している。これに対して、レファレンス教育はレファレンスの方法を教えるのであって、参考図書を教えることを主目的とするものではないという反論もあろう。しかし、参考図書の知識とは無縁

にレファレンスの方法はありえないということも事実である。"どのように彼が人間相互の心理に通じていても、どのようにうまく利用者をさばくことができたとしても問題ではない。もし彼が何から情報を求めるかを知らないならば、利用者の要求を満たすことはできないにちがいない。"¹⁰⁾

このような従来のレファレンス教育の方法を肯定する立場から、彼は実際的でレファレンス・ライブラリアンの必要とする役に立つ知識を分かちものでなければならぬと主張している。それならば、レファレンス基礎科目にはどのような内容が含まれなければならないだろうか。Bonk は次の4項目をあげている。すなわち、

1. レファレンス・ワークが何であるかということの説明。
2. すぐれた参考図書の特質の考察と新刊の参考図書の評価の問題。
3. レファレンス・ワークの‘管理’についての若干の論及——レファレンスと図書館の他の活動との関連、方針の明確化、部門の長の業務など。
4. ‘一般的’なレファレンス・サービスに役立つ参考図書の選択的リストについての研究。例えば百科事典、便覧、辞書、ディレクトリー、逐次刊行物など。¹¹⁾

上述の1~3についてはあまり異論はないけれども、最後の点については様々な意見が出されている。例えば、1663年のアメリカ図書館学校協会の会議において、約20校から25名の代表者の参加を得て、その教授法について議論したが、その要約¹²⁾によれば、次のような点が問題になっている。すなわち、レファレンス教育の目的は学生のレファレンス資料とサービスについての知識(その内容、評価、組織、利用法)を開発することである。しかし、資料をタイプごとに教えるか、主題からのアプローチにするかについては、まず前者を基礎科目において採り、次いで後者をとるとというのが多数意見であった。

また、Bonk の所説が投げかけた問題に対しては確かに大きな反響があった。すなわち、すべての学校で共通に教えるべき一定数のタイトルを収録した基本的なリストを作成することの可否が論じられたが、これに対しては否定的な見解が圧倒的に強かった。もっとも、Shores¹³⁾ や Winchell¹⁴⁾ のような参考資料として利用

レファレンス教育の動向

できる推薦書リストの採用は広く行なわれている。基本的ツールの理解はレファレンス・ワークにとって不可欠であるが、退屈さは避けられず、教育効果の面で問題がある。

このような結論をまつまでもなく、参考図書の特定のタイトルをとりあげるのは、特定のタイプの参考図書の特性を理解するための参考例としてのみ重要であるという考え方は数多くの支持者を得ていることは確かである。多種多様な参考図書が続々と生産されている場合に、参考図書についてタイプの面から十分な理解をもっているならば、要求に応じて適切な資料を選び出すことができるはずである。そのツールとして、Winchellをはじめとする参考図書の解題書誌を活用することができる。

實際上、数百にのぼる参考図書を機械的に暗記させることは労多くして得るところは少ない。限られた数の参考図書を覚えていて無限に多様なかたちをとる情報要求に対処しようとする自体無理なことである。その意味では、参考図書のタイプの特性について理解を深め、利用可能なツールの組み合わせによって、必要な参考図書の選択ができるようになっていた方がよい。このことは同時に、レファレンス・ワークに必要な判断力、創造的思考力の養成に資するものと考えられる。

勿論、参考図書のタイプを中心に教えることにも問題がないわけではない。限られた時間に一定数のタイプについて情報源としての特性を解説し、しかもそのタイプを代表する適切なタイトルを選び出すことは容易でない。タイトル中心の教育を重視しようとする立場からの批判は、重要なツールについての表面的な解説とか実質のない一般化という点に集中することになる。

従来一般的であった伝統的な資料中心のレファレンス教育の方法に一石を投じたのが T. J. Galvin である。レファレンス教育関係の論文に彼の論文の引用が多いのは、この分野における反響のあらわれであり、Bonk の見解と対立的に捉えられるのも、それが資料中心的な考え方と対立する方法の問題を重視しているからである。

Galvin はケース・メソッドをレファレンス教育に採用すべきことを主張して、自著 *Problems in reference service* を発表した。その序言で次のように述べている。

レファレンス科目の伝統的な‘課題’の部分は一連の練習問題からなっている。それらは最近学んだ参

考資料のどれかに書かれているある一つの事実を探し出すことを含んでいる。このような練習問題の代りとしてケース・スタディーを選んだのは、伝統的な課題ではレファレンス・サービスの実際に学生が対処しうるような有意義な経験をさせることはできないという確信があったからである。レファレンス・ワークは基本的には三つの操作からなる。すなわち、第1に、どのような情報が必要とされているかを正確に確認すること、第2に、この情報を提供するのに必要な資料の量と種類を決定すること、そして同時に、質問をしている個人がそれを効果的に利用するように配慮すること、第3に、特定の情報を情報源から探し出すことである。従来の課題を解決させる方法は前二者を除外し、学生にレファレンス技術の蒸留した最終結果を与えるだけのことである。

課題による方法に対してケース・スタディーのもつ特別の価値は、それが単一の教育手段のうちにレファレンスの応待のすべての要素（レファレンスの面接、特別の蔵書の強弱という条件のもとでのレファレンス・クエッションの解答を含む）を混入させることができるという点である。¹⁵⁾

このようにケース・スタディーによるレファレンス教育は実際のレファレンスの状況に近い条件を設定して指導することができるために、伝統的な資料中心の教育よりも学生に興味を抱かせる点においてすぐれている。ケース・スタディーに批判的な意見¹⁶⁾が出されたのに対して、直ちにケース・スタディーによって学んだ学生および関係者からケース・スタディーを支持する立場からの反論¹⁷⁾が発表されたのも、そのあらわれであるとしてよからう。ケース・スタディーによれば、多数の参考図書の細部にまでわたって暗記を強いることはないから学生からは歓迎されるはずである。

Galvin のケース・スタディーを支持した一人である K. F. Kister 自身も社会科学資料科目のためにケースをまとめた *Social issues and library problems*¹⁸⁾ を著わしたが、その序文で次のように述べている。すなわち、“伝統的な教育の補足としてケース・メソッドによる教育が行なわれるならば、社会科学文献を学ぶ図書館員は文献やそれから生ずる問題によりうまく対処することができるだろう…この想定は、どのような種類の専門的な図書館活動も意思決定、問題解決、計画および監督

というような管理的活動を当然含んでいる。そして、ケース・メソッドは図書館員にこれらの活動に備えるもっとも有効な手段を与えるものであるという私の信念に基づいている。¹⁹⁾ といっている。

ケース・スタディーによる教育は指導さえよければ、学生が自分自身で考えて意見を述べる機会が多く、レファレンス・ワークに必要な判断力を養うのに適しているが、短所がないわけではない。ケース・スタディーは“科学的に妥当性のある法則化を目指すのではなく、個別的レベルで特定の問題を解決することに方向づけられている²⁰⁾ から、レファレンス基礎科目の場合にこれを採用することは必ずしも適当ではない。しかも、限られた時間に多数の学生を対象とする場合には、実施が困難となる。

アメリカの図書館界では、レファレンス教育について1960年以後相次いで出された Bonk と Galvin の見解を対立的なものとして捉える傾向にあるが、すでにみたところからも明らかなように、そのようにみるのは必ずしも妥当ではない。教授方法の面からみるならば差異は明瞭であるが、内容的には、いずれも情報源としての資料に重点を置いている点に変わりはない。Bonk が資料の知識をより重視するのに対して Galvin は特定の図書館活動の文脈において資料の知識を生かすことを考える。Galvin のいうレファレンスの面接とレファレンス資料の‘人為的分離’を終らせる²¹⁾ というのはこの意味において理解できよう。

Thelma Freides は Bonk と Galvin との意見の共通の欠陥は“参考図書の知識とレファレンスに関連する管理的な状況を処理する能力とともに書誌的調整のシステムに固有な一般の原理の応用にすぎない²²⁾”ことを気づかない点があると指摘し、書誌的調整の原理に立った教育でなければならないことを示唆している。

Freides に限らず、近年とみにレファレンスの理論を求める声が強い。このことはレファレンス教育関係者にそれぞれの方法を問い合わせた結果をまとめた T. P. Slavens の報告²³⁾ によっても伺い知ることができる。彼はこの報告の結論として次のように述べている。

創造的でしかも想像力に富む教育がいろいろな学校のレファレンス科目で行なわれつつある。何人かの教授は科目内容を革進的に検討しているし、タイトルを覚えることよりも情報検索のプロセスに注目している。²⁴⁾

実務教育から次第に理論的研究に関心が移ってきた理由はいろいろあげられようが、図書館学の理論的基盤としての情報科学が近年著しく発達したこと、大学院課程における図書館学教育においては教授の調査研究活動を一層重視していること、学位取得のための大学院基準が高まったことなどの点を指摘することができよう。

もっとも図書館学教育における理論の強調は必ずしも現場としての図書館では歓迎されてはいない。実務教育としての性格が稀薄になることは経験を重んずるレファレンス・ワークに大きな問題を投げかけているようである。例えば、K. G. Harris は実務家の立場から、“図書館学を教えている多くの人は実際の経験からあまりにもかけはなれているという感じが強い²⁵⁾”と批判し、教師によって持ち込まれた専門家としてのバックグラウンドがいかに学生を啓発するものであるかを、自分の経験に照らして述べている。

III. わが国におけるレファレンス教育の推移と現況

既述のようなアメリカの図書館学校におけるレファレンス教育の変遷が直接間接にわが国の図書館学教育に影響を与えていることはいうまでもない。もっとも、レファレンス・ワークは第2次大戦以前にも問題にされたことはあったけれども、その教育の問題が注目されるようになったのは戦後のことであるとみてよい。

アメリカの図書館学校の場合にとりあげたレファレンス教育は大学院課程のそれであって、同等のレベルでのレファレンス科目はわが国にはまだ設けられていない。しかし、昭和26年以来、慶応義塾大学文学部に設けられているレファレンス科目がそれに匹敵するものと考えられるので、この科目の変遷をたどることによって、どのようにしてわが国のレファレンス科目が現在のようになかたちをとるにいたったかを明らかにしよう。

慶応義塾大学の図書館・情報学科におけるレファレンス教育はその前身である日本図書館学校で1951年に開始されて以来、今日まで継続的に行なわれている。初回および第2回は F. N. Cheney, 1953-1954 は J. M. Moore, 1954-1955 は A. M. Smith, 1955-1956 は George Bonn がそれぞれアメリカからの訪問教授として担当し、1956-1957 になってはじめて日本人教師が担当することになった。

この間のアメリカからの訪問教授によるレファレンス基礎科目は、当然のことながら、当時アメリカの図書館

レファレンス教育の動向

学校で一般的であった資料中心の教授方法によっていた。教授が日本語を理解しないこと、例示できるような日本語の参考図書が十分にないこと、また、たとえあったとしても資料室に備えられていないために利用できないことなどの理由から、欧文資料、とりわけアメリカ出版の資料に限られざるをえなかった。

しかし、学生の大部分は日本語の参考図書を使う必要のある図書館に勤める関係上、欧文資料に代ってより多く日本語の参考図書を例示的にとりあげる必要があった。そのために、科目の目的、教授方法には変更はみられなかったけれども、逐年日本語の参考図書の解説に重点を置くように努力が重ねられた。レファレンス基礎科目である‘Informational and Bibliographic Sources and Methods (調査及び書誌的資料と取扱法)’と称する科目の場合、最初に設定された目的は次のようなものである。

言語、伝記、地理の分野における種々な一般参考図書および特殊資料を紹介すること。重要な書誌、辞典、百科事典、ハンドブック、ディレクトリー、雑誌記事索引などがこの中に含まれる。これらの資料を様々な読者を対象とし、また異なった図書館において使用する方法に重点をおく。²⁶⁾

1956年になって藤川正信氏がこれまでの訪問教授に代って、日本人としてはじめてこの科目を担当することになったが、日本語の参考図書に重点を置いた点以外には、とくに顕著な変更は認められない。このことは科目概要において明らかにされている次のような目的を上げの目的と比較することによって理解することができる。

各種の資料及び方法を取りあげてレファレンス・サービスの意義を明らかにする。とくに、(1) 一般的な参考図書を紹介し、(2) 言語・伝記・地理の部門における個別的資料に言及する。重要な辞典、百科事典、書誌、ハンドブック、ディレクトリー及び雑誌記事索引を含む。各種図書館における各種の要求に応じ得る如く、上述の資料を利用することに重点をおく。²⁷⁾

その後、この科目名は1957-58年に「参考資料・調査法」となり、さらに1962-63年に「資料情報調査」と改められた。しかし、内容面での大巾な変更はとくに認め

られない。強いてあげるならば、方法の問題がやや重視されるようになったこと、また、資料についても個々のタイトルを解説することよりも、各種のタイプの面から検討を加えることに重点を移したことがうらであろう。このことは次のような科目概要の目的の説明から伺える。

本科目は参考事務を中心として資料調査活動の諸問題を考究し、情報源としての各種の資料をとりあげ、利用評価の立場から書誌的知識を深めることを目的とする。

これは他の主題関係資料科目の基礎となるものであって、それらが各主題の観点から研究されるのに対して、この科目においては一般的な問題のとりあげ方がなされる。それゆえ、主題分野独特の資料よりは一般的性格の参考資料の各種タイプに重点がおかれている。²⁸⁾

ここにいう主題関係資料科目は従来‘Advanced Course of Informational and Bibliographic Sources and Methods’という英文科目名をもつ「参考資料・調査法(第二部)」に相当するもので、1962-1963年から「人文科学資料」、「社会科学資料」、「科学技術資料」の三つに分割された科目である。これはいうまでもなく、アメリカの多くの図書館学校のレファレンス関係科目のパターンにならって分けられたもので、各主題分野の「資料・文献の特徴を説明し、この分野の代表的研究、参考資料を解説し、その利用法を論ずる」²⁹⁾ことを目指している。

「資料情報調査」として知られていたレファレンス基礎科目は1968-1969年に「参考調査資料」と「参考調査法」とに分割され、その内容を大巾に改変することになった。この改訂は図書館学科が図書館・情報学科と改められたことと呼応するものであって、方法の問題に一層重点を置こうとする意図がこめられている。

「参考調査資料」においては、書誌、参考図書など、各種のタイプの資料の情報源としての特性を捉え、書誌的知識を習得せしめることが主目的であり、例示的に取りあげられる個々の資料の具体的内容を理解させることはむしろ副次的目的であるといつてよい。

このような意図のもとに、この科目の主要部分を(1) 書誌、(2) 索引、(3) 参考図書、(4) 言語辞書、(5) 百科事典、(6) その他の参考図書、(7) 逐次刊行物、(8)

地名関係参考図書、(9) 人名関係資料の9部から構成したわけである。

(1) 書誌は各種資料の有無の確認のため、またその書誌の事項を照合するために利用される基本的タイプの2次資料である。したがって、その意義および種類について検討することによって、2次資料の理解に役立つ有用な示唆が得られるはずである。同様な意味において、今日のような書誌があらわれるまでの発達過程を概観する必要がある。なお、書誌のうちにある所在指示機能を発揮する目録、総合目録を含めて考える。

(2) 索引としては書誌と類似の機能を果たす目録索引、すなわち雑誌記事索引、叢書・集成索引と資料内容へのアプローチを可能にする内容索引すなわち要語索引、巻末(別巻)索引とを含める。これらは特定の資料あるいは情報の検索媒体として利用できるレファレンス・ツールであるから、既述の書誌と対比しつつ、その意義を検討する必要がある。

(3) 参考図書はいわば‘濃縮情報源’であって、特定の情報記事が容易に参照ないし調査できるように作られた図書である。したがって、まず各種の参考図書に共通する意義を確認し、評価上の留意点を検討すれば、各種の参考図書の理解に役立つはずである。ここであわせて参考図書の評価・選択上のツールとしてその解題書誌、選択書誌などをとりあげておく。

以下、ことばの情報源としての(4) 言語辞書、各種事項の情報源としての(5) 百科事典をとりあげると、両者の区別は必ずしも明確に行なえるわけではない。したがって、それぞれ意義、種類、発達などにわたって検討し、利用上の立場から代表的なタイトルをとりあげて評価を加えることにする。各種の専門事典、便覧、図鑑、年表など、(6) その他の参考図書は専門主題との関連が深い、いずれも参考図書のタイプとしての側面から、それぞれの特性を検討する。

(7) 逐次刊行物は参考図書の一つのタイプとはいえないが、年鑑類、索引逐次刊行物、抄録逐次刊行物など、参考図書として扱われるものが含まれている。参考図書としては扱われない雑誌、新聞でも、参考図書からは得られない種類の情報を迅速に提供するので、極めて有用である。その意味から、これらの特性、さらにこれらの2次資料について検討する。

(8) 地名関係の参考図書としては地図帳、地名事典、旅行案内書などを扱うが、地理関係の主題の側面からこれらを取りあげるわけではない。あくまでもそれぞれの

タイプとして取りあげるが、地名が他の主題との関連において各種の情報への有力な手がかりになるところから、とくに地名関係の参考図書としてまとめることにする。同じような意味において、人名は各種の情報にアプローチできる有力な手がかりとなる。(9) 人名関係資料のもとでは、人名事典、名鑑類のような参考図書のほかに、広く人名関係の情報源を含めて考えている。

上述のような内容の「参考調査資料」と密接な関係をもっているのが「参考調査法」である。この科目では情報を求めている利用者が図書館という場において、必要な情報を入手しようとする際に提供される人的援助を中心課題とする。したがって、一方では利用者行動の研究、情報要求の分析、情報の収集および利用の習性の研究がこれにかかわる。他方では、情報および情報源、とりわけ図書館の収集対象である資料情報源の特性把握が必要とされる。「参考調査資料」において学んだ書誌的知識はこの場合重要な基礎的知識を提供するはずである。

情報を求める利用者に情報(源)を提供するための人的援助がレファレンス・ワークであるとするならば、レファレンス・プロセスの研究はこの科目において極めて重要な位置を占めることになる。レファレンスの面接から要求内容の確認、探索戦略の決定、探索の実施、情報(源)の入手・評価を経て、提供にいたるまでの一連のプロセスの各段階がトピックを構成する。

しかもレファレンス・プロセスは図書館という文脈から抜き出して捉えることはできない。図書館業務としてのレファレンス・ワークを考えるならば、レファレンス・ワークの意義、その業務および部門運営の問題も看過することはできないであろう。また、当然そこで業務を担当する人の問題も極めて重要である。人的援助形式を特徴とするレファレンス・ワークの質を決定的に左右するのは人であるといつてよい。

以上、レファレンス・ワークにかかわる四つの主要な領域として、情報(源)を求める利用者、情報および情報源、レファレンス・プロセス、レファレンス・ワークが展開される場としての部門をあげることができる。しかし、レファレンス・ワーク固有のサービスとしての受動的情報サービスに加えて、能動的情報サービスをも含む概念として参考調査活動ということばを用いる場合には、もう一つの重要な領域を加えなければならない。それは書誌作成をはじめとする2次資料作成サービスであって、利用者の要求をまたずして、積極的に情報を配布

レファレンス教育の動向

することによって要求を醸成することを目的とする書誌サービスの領域である。そのためには、あわせて準備業務として文献探索、インフォメーション・ファイルその他のファイルの編成も必要となるはずである。

上記の諸領域を含み、かつ「参考調査資料」との関係を考えて「参考調査法」の内容を構成するならば、次のようにまとめることができよう。

1. 序論
 - a. 情報； b. 情報の利用； c. 情報源としての記録資料； d. 資料と図書館
2. 参考調査活動
 - a. 参考調査活動の意義； b. レファレンス・ワークの発達； c. 発達を妨げている主な要因； d. 情報サービスの発達
3. 参考調査機能とその業務
 - a. 参考調査機能； b. 利用指導と情報（源）提供； c. 参考調査業務； d. 読書相談業務
4. 参考調査部門
 - a. 参考調査部門の組織； b. 管理・運営； c. 他部門との連携； d. 情報源の構成
5. 参考調査質問
 - a. 参考調査質問の意義； b. 回答； c. 処理記録； d. 質問回答の分析
6. 文献探索
 - a. 文献探索の意義； b. 方法； c. 探索における障害
7. 書誌サービス
 - a. 書誌サービスの意義； b. 書誌の作成； c. 索引の作成
8. インフォメーション・ファイル
 - a. インフォメーション・ファイルの意義； b. パンフレット資料； c. クリップング資料
9. 参考調査担当者
 - a. 参考調査担当者の意義； b. 資質； c. 専門的知識・技術³⁰⁾

この「参考調査法」は「参考調査資料」を履修したのちに受講するように計画されており、いずれも通年科目であるから原則として2年を要する。これらはいずれも演習科目としての性格が強く、講義に加えて各種の課題が準備されている。

これらの基礎科目の履修を前提として、社会科学、人文科学、科学・技術の各分野ごとの専門主題資料科目が

設けられている。いずれもその必修部分は半期であり、当然、時間的な制約はかなりきびしい現状である。例えば、「社会科学資料」の科目概要を述べれば次のとおりである。すなわち、社会科学分野の古典的著作、代表的研究を解説し、社会諸科学の成立と各学派の系譜をたどり、さらに最近の研究動向を探り、この分野における書誌の調整の現況を展望する。これに加えて、各主題の面から主要な書誌・参考図書を取りあげ、利用上の評価を与える。こうすることによって、社会諸科学の主題関係文献および情報を利用する際に生ずる問題点を捉え、その解決策を検討するのがこの科目の目的である。なお、課題として書誌の作成・提出が求められている。他の専門主題資料科目も、対象とする分野は違うけれども、これとほぼ同様の内容と目的をもっていると考えてよい。

おわりに

これまでアメリカのレファレンス教育の変遷と現状を概観し、わが国のそれへの影響を明らかにした。教育条件に差異があるにもかかわらず、技術的・方法的な諸問題については、アメリカの図書館学教育から学びうる多くの点が見出される。しかし、それらを無批判に教授法として採用することは、やはり慎まなければならない。わが国独自のレファレンス教育を進めるためには、アメリカのその単なる模倣であってはならないはずだからである。

とはいえ、わが国の社会的文脈において、図書館の独自のレファレンス・ワークの実践を欠いている現状では、単に実務を具体化したカリキュラムを採用するだけでは専門職教育とはなりえない。したがって、まず当面する独自の問題点を探りあて、そのような制約のもとに選びうる有効な方法を検討し、望ましいレファレンス教育のあり方を追求しなければならない。

わが国の場合、最大の障害となっていることは、まだレファレンス・ワークが図書館において不可欠な機能を果たすものとして捉えられていない点である。また、情報源として中核的位置を占める書誌のツールも未発達である。たとえ書誌のツールが十分整備されていなくても、学生が情報源を適切に処理しうるだけの主題に関する専門的知識を備えているならば別であるが、学部課程の学生にそれを望むのは無理である。しかも、学生の大多数は図書館ですぐれたサービスを受けた経験もなければ、いわんや実務についた経験もない。

以上の諸点を考慮するならば、講義のみでは不十分で

あり、どうしても具体的な事例に基づいた教授法を導入する必要が認められる。しかし、ケース・スタディーがアメリカで成功したからといって、直ちにこの方法をわが国の場合に採用することには疑問がある。時間的制約がある上に、多数の学生を擁するクラスでは、選べるケースが限られ、技術的にも困難が生じ、実効性は期待できないからである。レファレンス・ワークについて全く経験のない学生には、個々の問題について設問しながら基礎的知識のかん養に主力を注ぐべきであろう。ケース・スタディーはむしろセミナーあるいは特殊な選択科目における方法として採用した方がよい。

設問の場合にしても、単に連続的にもちかけられる千差万別の情報(源)要求のひとつひとつの処理の仕方を経験的に学ばせるだけのことならば、実習とかインサervis・トレーニングに譲った方がよい。大学の科目においては、個別的で複雑多様なありのままの現実をそのままのかたちで教えるのではなく、まずそれらを分析的に整理し、それらの相互関連を明らかにしたある種のモデルを構成する必要がある。しかし、同時に、それが現実のレファレンスの具体的諸問題から遊離して、観念的にならないように、情報(源)の要求から提供にかかわる図書館の文脈におけるレファレンス・プロセスについて、方法論的反省が加えられなければならない。つまり、個別的な設問であっても、全体的で総合的な提示につとめる必要がある。こうすることによって、望ましいかたちのレファレンス・ワークの実践に対して、合理的な判断の基礎となる客観的な認識を供与することができるはずである。

しかし、これでレファレンス教育のすべてが完結すると考えてはならない。従来のレファレンス教育の欠陥は問題意識や研究方法が狭いレファレンス技術のわく内に閉塞され、そこに自己完結していたことにある。実は、その方法を通じて、再び具体的な問題の研究にたち帰ることによって、はじめて実質的な実証的研究ができるのである。

ところが、独自のレファレンスの実践が十分発揮されないでいるわが国の図書館の場合には、そこで応用され、検証される機会を求めるとがむずかしい。どのように方法的基準が高度であろうと、図書館における実践活動とたち切られたレファレンス教育は、専門職教育として致命的な欠陥をさらすことになる。したがって、専門職者としての実務家の協力を得て、あるべきレファレンス教育の方向を見定めることが当面の重要な課題であ

る。

(図書館・情報学科)

- 1) Lawrence, Edith C. "An example for new course for library schools," *Library journal*, vol 60, Dec. 1, 1935, p. 921.
- 2) Alice Bertha Kroeger の初版以来、書名は変更されたけれども、1967年刊の第8版まで、いずれも図書館学校その他の館員養成コースの教科書として使用されることを目的としている。
- 3) 初版は1927年刊であるが、広く普及したのは1930年刊のものである。
- 4) Reece, Ernest J. *The curriculum in library schools*. New York, Columbia Univ. Press, 1936. p. 63-4.
- 5) Asheim, Lester, ed. *The core of education for librarianship*; a report of a workshop held under the auspices of the Graduate Library School of the University of Chicago, August 10-15, 1953. Chicago, A. L. A., 1954. p. 20.
- 6) *Ibid.*, p. 23.
- 7) Cheney, Frances N. "The Teaching of reference in American library schools," *Journal of education for librarianship*, vol. 3, Winter 1963, p. 188.
- 8) "Teaching bibliography and reference—four divergent views," *Journal of education for librarianship*, vol. 9, Summer 1968, p. 18-44.
- 9) Bonk, W. J. "Core curriculum and the reference and bibliography courses," *Journal of education for librarianship*, vol. 2, Summer 1961, p. 30.
- 10) Bonk, W. I. "The core reference course," *Journal of education for librarianship*, vol. 4, Spring 1964, p. 202.
- 11) *Ibid.*, p. 200-1.
- 12) Boaz, Martha. "The conferences that were," *Journal of education for librarianship*, vol. 4, Spring 1964, p. 195.
- 13) Shores, Louis. *Basic reference sources*. Chicago, A. L. A., 1954, 378 p.
- 14) Winchell, Constance M. *Guide to reference books*. Chicago, A. L. A., 1967. 741 p. and suppl.
- 15) Galvin, T. J. *Problems in reference service*. New York, Bowker, 1965. p. vii-viii.
- 16) Freides, Thelma. "Will the real reference problem please stand up?" *Library journal*, vol. 91, Apr. 15, 1966, p. 2008-12.
- 17) "Simmons' support for the 'case,'" *Library journal*, vol. 91, June 1, 1966, p. 2736.
- 18) Kister, Kenneth F. *Social issues and library problems*. New York, Bowker, 1968. 190 p.

レファレンス教育の動向

- 19) *Ibid.*, p. v.
- 20) Monly, G. J. *The science of educational research*. New York, American Book, 1963. p. 354.
- 21) Galvin, Thomas J. "Case technique in education for reference service," *Journal of education for librarianship*, vol. 3, Spring 1963, p. 256.
- 22) Freides, *op. cit.*, p. 2012.
- 23) Slavens, Thomas P. "Teaching reference work; some current approaches," *Library journal*, vol. 93, Apr. 15, 1968, p. 1591-3.
- 24) *Ibid.*, p. 1593.
- 25) Harris, Katharine G. "Reference service today and tomorrow: Objectives, practices, needs, and trends," *Journal of education for librarianship*, vol. 3, Winter 1963, p. 184.
- 26) 慶応義塾大学文学部日本図書館学校. シラバス, 1953-54. (mimeog.)
- 27) *Ibid.*, 1956-57. (mimeog.)
- 28) *Ibid.*, 1962-63. (mimeog.)
- 29) 慶応義塾大学文学部図書館学科. 要覧. 昭和 37 年度, p. 25.
- 30) 長沢雅男. 参考調査法. 東京, 理想社, 1969. 262p. の目次とほぼ同様な構成である.